

効果的な取組みのポイント (異年齢交流)

異年齢交流に積極的に取り組んでいる学校園での成功の秘訣は、「互恵性」、すなわち幼児にとっても、小学生にとっても意味のある活動を実施することである。それぞれに成就感があって、学びがあることが大切である。一方通行のイベント的な取組みでは効果が少なく継続が難しい。



(1) カリキュラムの工夫

- ① 生活科や総合的な学習の時間、特別活動などのカリキュラムに位置づけ、互いに意味のある活動になるようにする。
- ② 「ねらい」を明確にし、互いに成就感が得られ、学びが成り立つように幼保小ともに指導計画等を作成する。
- ③ 各教科で学習したことを定着させ、発展させる上で幼保小連携が効果的な場合に、生活科等と連携して異年齢交流を位置づける。
- ④ 幼稚園の活動と生活科等の活動が重ならないように計画的、組織的に一貫したシラバス等を作成する。

(2) スタイルの工夫

- ① 「全体と全体」という交流から、年間を通して固定した小グループによる活動を継続的に取り組むと、顔と名前が一致するようになって効果的である。
- ② 見学するだけというような「一方的な招待」だけでなく、一緒に何かを作ったり、楽しんだりするような相互参加型の活動を工夫する。
- ③ 「5歳児と5年生」(新年度は1年生と6年生)など学年を決めて年間を通して交流する。
- ④ できるだけ子どもの主体性を大切にして、子どもたちに計画立案などを任せ、教師はそれが成功するような支援をする。

(3) 取組みにあたっての工夫

- ① 交流する学年がそれぞれに連絡を取り合うのではなく、窓口になる担当者を決めて連絡調整する。
- ② 管理職や連携担当者等は、密接に連絡を取り合って学校・園全体の様子を把握しながら、「連携便り」等を作成するなど、幼保小連携の成果を全職員に広める工夫をする。
- ③ 交流の前後に必ず打合せや反省会を持ち、ねらいや具体的な流れのイメージを共有し、その成果も確認して次の取組みに生かす。